博士学位論文審査要旨

２０１７年6月２２日

論 文 題 目：　『宇治拾遺物語』昔話関連話群の研究
学位申請者：　金 恩愛
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科教授　廣田 收
　副　査：　文学研究科教授　植木朝子
　副　査：　文学研究科教授　藤井俊博

要　　旨：

本論文は、鎌倉時代初期に京都で成立した説話集『宇治拾遺物語』の中で、特に昔話と同じ話型を共有する説話群を対象とし、従来の文献相互の比較研究に対する再検討だけでなく、日本昔話の採集記録と『韓国口碑文学大系』とを活用して、構成と表現という複眼的な視点に基づく、新たな比較研究の分析方法によって、説話群の文学的な評価を試みたものである。

この説話集に収録されている昔話関連話群は、インドのジャータカに淵源をもち、中国仏典を出典とする説話群から、『宇治拾遺物語』を歴史的に初見とする出典不明の説話群にいたるまで、昔話と同じ話型をもつ話群が存在する。第一章では、第四八話「雀報恩事」を日本昔話「腰折雀」と韓国昔話「フンブ伝」と比較し、説話が都市的な家族関係を主題として編纂されていることを指摘する。また第二章では、第三話「鬼瘤被取事」を『譬喩経』『酉陽雑俎』だけでなく、日本昔話「瘤取爺」や韓国昔話「瘤取爺」との比較を試み、日本・朝鮮における地域的、歴史的な異同をもとに、説話における主人公の描写に重点があることを指摘する。また第三章では、第九六話「長谷寺参籠男預利生事」を仏教説話集『今昔物語集』や世俗説話集『古本説話集』と比較し、また日本昔話「藁蕊長者」と韓国昔話「藁縄三本」と比較することで、類似点と相違点とを精神性の問題として論じる。さらに、仏典との比較を試みた結果、韓国昔話がインドの『カター・サリット・サーガラ』やジャータカ、仏典『根本説一切有部毘奈那』に近いことを指摘し、従来の影響論的、伝播論的考察を批判している。また第四章では、第九二話「五色鹿事」を日本昔話「五色鹿」と韓国昔話「五色鹿」と比較し、さらにジャータカや中国の『法苑珠林』と比較し、世俗説話化のあとを辿っている。また、第五章では、第八五話「留志長者事」について、『今昔物語集』や韓国昔話「壅固執伝」、『法苑珠林』と比較し、第八五話が男と妻との応答を中心に物語化されていることを指摘している。

かつて『宇治拾遺物語』を昔話を記録した文芸とみる評価も存在したが、本論文は、従来の日本古典文学研究が中国と日本との間だけで、特に文献相互の関係に限って比較を試みてきたことに対して、中国・日本・朝鮮という三者の関係の中で、また、日本・朝鮮の口承文芸を対照させることで、『宇治拾遺物語』が中世京都における家族問題を基盤として成立していることを解明した点で、比較研究に新たな地平を拓いたものと評価できる。

よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１７年6月２２日

論 文 題 目：　『宇治拾遺物語』昔話関連話群の研究
学位申請者：　金 恩愛
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科教授　廣田 收
　副　査：　文学研究科教授　植木朝子
　副　査：　文学研究科教授　藤井俊博

要　　旨：

上記審査委員３名は、２０１７年６月１７日、午後４時から約２時間にわたり、徳照館２階の共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行なった。

学位申請者は、審査員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、外国語（英語）についても、充分な学力のあることが確認された。

よって、本論文に関する総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：　『宇治拾遺物語』昔話関連話群の研究
氏　　名：　金　恩愛

要　　旨：

本論文は、『宇治拾遺物語』における昔話関連話群について日中韓という広い視野のもとで、併せて日本と韓国の口承と書承との関係について分析し、鎌倉時代に成立した『宇治拾遺物語』の表現の特徴について考察したものである。

第一章第一節では、『宇治拾遺物語』（以下、『宇治拾遺』）「雀報恩事」と韓国昔話「フンブ伝」との比較考察を行うことによって、「雀報恩事」の独自的構成と表現の特徴について検討した。

この比較によって『宇治拾遺』「雀報恩事」は、老女と隣の老女との対立関係だけではなく、老女と孫との対立という、家族間の対立・葛藤関係が存在し、その家族内の葛藤を中心に話が展開され、葛藤による感情の変化が、表現の繰り返しなどによって詳しく描かれていることが特徴であることを明らかにした。

第一章第二節では、『宇治拾遺』「雀報恩事」と同じ話型をもつとされる韓国昔話「フンブ伝」を取り上げ、主語＋述語を一つの単位とする事項を取り出して構成の特徴について考察した。その結果、韓国昔話「フンブ伝」は、田中梅吉訳や八束周吉訳「興夫伝」と比べ、導入部分における主人公の性格の特徴を表す表現などは、大きく省略されているが、日本の昔話「腰折れ雀」の構成と類似していることを明らかにした。

第一章第三節では、『宇治拾遺』「雀報恩事」及び日本昔話「腰折雀」と韓国昔話「フンブ伝」との比較を試みた。まず、〔『宇治拾遺』及び韓国昔話「腰折雀」類話対照表〕を作成し、最も重要な相違点と共通点を取り上げ比較考察した。さらに、〔日本昔話「腰折れ雀」類話事例一覧表〕を作成し、日本昔話「腰折れ雀」の特徴を検討し、韓国昔話と比較考察した。

ここで同じ話型が日韓双方の昔話に共有されているだけではなく、『宇治拾遺』「雀報恩事」に同じ話型が共有されていることを明らかにした。さらに、『宇治拾遺』では、鎌倉期における都市的な家族問題が主題として付加されていることを明らかにした。

第二章第一節では、同じく「隣爺型」の説話とされる第三話について、日本昔話「瘤取爺」の採録事例を集めて比較対照表を作成し、話型を分析することによって、『宇治拾遺』の構成と特徴について考察した。すなわち『宇治拾遺』第三話は、第四八話と同じく「隣爺型」に属するが、昔話「瘤取爺」では、善悪の対立関係が関与しない事例が多い。また『宇治拾遺』第三話では主人公の踊りの上手・下手という対立関係がみられることを明らかにした。

第二章第二節では、日韓昔話「瘤取爺」の研究史について検討した。『宇治拾遺』「瘤取爺」の出典として仏説『譬喩経』や『酉陽雑俎』「旁砲説話」などが指摘され、中国大陸から日本へ、もしくは、韓国を通って日本へ伝わったという枠組みで論じられてきたことを明らかにした。

第二章第三節では、『宇治拾遺』や日本昔話「瘤取爺」との比較考察のため、第二章第一節と同じく、昔話集及び『韓国口碑文学大系』に収録される、韓国昔話「瘤取爺」の採録の事例を集め、〔韓国昔話「瘤取爺」の事例比較表〕を作成した。〔比較表〕では、発端・展開・結末にわけて、各事例の特徴を明らかにした。

第二章第四節では、前節で作成した〔比較表〕を活用し、『宇治拾遺』及び日本と韓国昔話「瘤取爺」類話の大きな相違点として四つの点を取り上げ、比較考察を行った。

すなわち、日本昔話や『宇治拾遺』では瘤を取ってもらうことを目的とするが、韓国昔話において瘤は、主人公が裕福になるための手段である。そのため、日本昔話や『宇治拾遺』では上手

な踊りが、韓国昔話は富を得ることができる方法の一つとして「瘤を売る」という設定が必要だということを明らかにした。

第二章第五節では、これまでの比較考察を踏まえ、日本と韓国の伝承比較の論点を、六つにまとめて整理し、その特徴と背景について考察した。

以上、日韓両国ともに、「瘤取りに行って、瘤付けられる」という構成は共有されており、ともに前半と後半が対照するような構成をもつ。しかし、モチーフを詳しく分析すると、韓国昔話は瘤から歌が出るという発想の特異さとともに、その瘤を売ったり、さらに瘤を取られた代りに、金銀宝物などといった補償を求めたりすることが特徴であるが、日本昔話では、主題が危機の回避や災厄の除去、もしくは幸福な結婚や富の獲得にある。それは、日本と韓国という異なる地域性や伝承の歴史性によって表現に異なりが生じたと推測できる。同時に、『宇治拾遺』では、結末に至るまでの説明や、主人公の心理の描写が特徴であることを明らかにした。

第三章第一節では、〔『宇治拾遺』類話本文対照表〕を作成し、同話関係にある『今昔物語集』（以下『今昔』）『古本説話集』との比較考察を行った。すなわち、『今昔』が仏教説話として宗教的目的を持った、長谷寺観音の霊験を語った霊験譚だとすれば、『宇治拾遺』の場合は、当時流行の世間話の一つとして語ったものだと考えることができる。

第三章第二節では、日本昔話「藁しべ長者」について考察した。日本昔話「藁しべ長者」話型は、交換する物のモチーフの違いによって、「三年味噌型」と「観音祈願型」に分けられる。それで、各話型の採録事例の事項を取り出して比較考察を行った結果、「観音祈願型」は藁から次々と物を交換し、裕福になるという亜型であるが、「三年味噌型」の場合、最後に刀と金の交換ができたのは、主人公の作り話（嘘）があったからこそ交換が可能になる点が特徴であることを明らかにした。

第三章第三節では、韓国昔話「藁しべ長者」との比較考察を行った。採録事例によると、韓国昔話は大きく「藁縄三本」型、「藁一粒で」型に分けられ、そのうち、韓国昔話「藁縄三本」型が日本昔話「藁しべ長者」型に類似することを明らかにした。

第三章第四節では、『宇治拾遺』や『今昔』『古本説話集』と昔話「藁しべ長者」類話の原典とされる『カター・サリット・サーガラ』、『ジャータカ　四話』、『根本説一切有部毘奈耶』『六度集経』と比較考察した。これによって、比較対象となる四つの昔話には、類似するところが多くあり、特に物を交換していく始まりとなるものの場合、四話とも死んだ鼠である。このようなモチーフは、韓国昔話では代表的な事例であるが、日本昔話には見当たらないことを明らかにした。

第三章第五節では、日韓昔話「藁しべ長者」の話型について考察した。日韓昔話「藁しべ長者」は、『ジャータカ』や仏典を出典としながら、韓国昔話では儒教思想が、日本昔話では仏教的要素が強調されている。さらに昔話の構成からみると、先行研究において、韓国昔話「藁縄一本」型と日本昔話「観音祈願型」とが類似すると指摘されてきたが、今回の考察により、韓国昔話「藁縄一本」型は、ジャータカや仏典『根本説一切有部毘奈耶』に近いことを明らかにした。

第四章第一節では、『宇治拾遺』「五色鹿事」から事項を取り出して、説話を構成する骨格をなす基本的事項と、付加的に形成されている説明的事項とを区分し、話型と構成について分析を行った。

第四章第二節では、日本昔話「五色鹿」の採録事例を集め、話型の特徴について「恩知らずの人間」型と「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」型に分けられることを明らかにした。

第四章第三節では、『宇治拾遺』及び日本昔話「五色鹿」類型との比較考察に向けて、韓国昔話「五色鹿」の採録事例を調べ、特徴について考察した。

第四章第四節では、本論において作成した〔『宇治拾遺』「五色鹿事」日本昔話類話比較表〕と、〔韓国類話対照表〕を活用し、日韓昔話「五色鹿」について比較考察を試みた。日韓両国における昔話「五色鹿」は、動物は恩返しをするものの、人は恩を忘れるか、恩を仇で返すものであるという主題を基本とする。「五色鹿」の話型は、ジャータカや『法苑珠林』（以下、『法苑』）

など、仏典を出典としているが、『宇治拾遺』は出典にあった仏教色が消され、慈悲報恩の大切さを説く教訓的な動物説話に変わり、仏教的な要素より人間社会における教訓について語っている。出典から世俗説話化された『宇治拾遺』「五色鹿」の話型は、『今昔』、『仏説九色鹿経』、『法苑』などに比べ、昔話「報恩動物・恩知らずの人」にもっとも近いことを明らかにした。

第五章第一節では、『宇治拾遺』「留志長者」と『法苑』、『今昔』との本文比較を行い、『宇治拾遺』「留志長者」に加えられた展開を取り挙げて、『宇治拾遺』における位置と意義について考察した上で、韓国『壅固執伝』と、『法苑』『今昔』との比較考察を行った。

第五章第二節では、『宇治拾遺』「留志長者」と同じ話型をもつ、韓国の古典「壅固執伝」の異本や研究史を整理し、新たに採録事例を集め、「壅固執伝」の話型と構成について考察した。

第五章第三節では、『宇治拾遺』や「留志長者」と『法苑』や『壅固執伝』の比較分析を行い、仏典説話の受容と変化について考察した。『宇治拾遺』では、結論に至るまでの妻とのやりとりが中心に語られている。『法苑』や『今昔』には、このような展開は記されていない。そのようなところに、説話としての『宇治拾遺』の楽しさがあり、物語化させるための『宇治拾遺』の工夫がある。さらに、『法苑』では仏の教えとしての因果が重視されているが、『壅固執伝』では道徳的教訓や「母親の親不幸を嘆く歌」と「親不孝」が繰り返し表現されているなど、儒教思想が重視されている。

以上のように、日韓昔話と比較することによって『宇治拾遺』昔話関連話群が、仏教説話的要素を引き継ぎながらも、原典より世俗説話として物語化され、鎌倉初期の京都における家族関係を主題とする説話として編纂されていることを明らかにした。